

17 節。 **「さて、イエスが行って御覧になると、ラザロは墓に葬られて既に四日もたっていた。」**

当時、ユダヤにおいては、死ぬと、なるべく早く死体を墓に入れた（使徒 5 章 1 節以下のアナニアとサフィラのところを参照）。主イエスも十字架で死んだとき、直に下ろされ、墓に葬られた（ルカ 23:44 以下参照）。だから、**「墓に葬られて既に四日もたっていた」**ということは、恐らく四日ほど前に死んだということであろう（【TEV】 Lazarus had been buried four days before.）

ユダヤ教のラビ文献によると、「三日間、死者の魂は屍の上を漂っていて、元の古巣に戻ろうとしている」。ところが、その三日が経ち、だんだんと屍が腐って行って、様子が代わってくると、諦めて 4 日目からは「魂は去って行く」と、こういう信仰が、民間の俗信であるだろうけれども、ある。

このような民間の信仰が主イエスの時代にもあったとすれば、主イエスがラザロの墓に折角お見えになったのが**「四日もたっていた」**時であったということ、もう漂っていた靈魂も諦めて神の所へ行ってしまった後である。もう魂が体に戻りたくても戻れない。つまり、蘇りは不可能になってしまった時に、主イエスが来たということになる。

18 節。 **「ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほどのところにあった。」**
聖書の後ろの付録「度量衡および通貨」のところによると、「一スタディオン」は約 185m。「15 スタディオン」は、約 3 キロ弱。

19 節。 **「マルタとマリアのところには、多くのユダヤ人が、兄弟ラザロのことで慰めに来ていた。」**

「マルタとマリア」という二人の女は、ルカによる福音書 10 章 38 節以下に、もう一度出てくる有名な姉妹。そのルカの方でも、姉妹の性格は、ここと全く同じ性格で描かれている。つまり、いつでもマルタが率先して主イエスを家に迎え入れる。そして、もてなしのために非常にてきぱきと働く人である。一方、マリアは、ルカによる福音書でもここでも主イエスの足元に座り、ひれ伏す（32 節）。ただ、二人の姉妹の性格は違うけれども、主イエスに対する信仰は同じである（21 節、32 節）。もう一つ、マルタは 27 節で**「主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」**と告白しているが、それがマリアの場合には、主イエスの**「足もとにひれ伏す」**という礼拝の行為に暗示されている。だから、ヨハネによる福音書は、この二人の姉妹に、人間的には性格の違いがあるけれども、主イエスに対する信仰的な態度は全く同じであることを伝えていると言える。

それがどういう信仰であるか。第一に、21 節、22 節のマルタの言葉によく出ている。**「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう**

に。しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」

第一に、主イエスなら「なんでも」叶えられるということ。この事を、少なくとも理論的には、二人の姉妹は信じている。

第二に、主イエスが全道だからイエス様はどんなことでも出来るというのはなく、「あなたがお願いになることは」「神は叶えてくださる」というように、主イエスは何か神様に私たち人間のお願いことを、どんな願いことでも取り次いでくださるところの取り次ぎ手、仲立ちというくらいの位置づけになっている、という点。

このことは「お願いになる」と訳されている言葉 (αἰτέω、**アイテオー**) は、ヨハネによる福音書では、いつでも人間が神様にささげるお願いや祈りを表すのに使う言葉であって、主イエスが父なる神様に願い祈るという時には、この言葉は絶対に使わない。因みにその言葉は、ἐρωτάω (**エロータオー**) である (14:16、17:9、15 など)。

つまり、マルタによると、今ここで、主イエスはまだなんとなく全能の神とまではいかない、やはり人間と同じような、ちょっと取り次ぎが上手なお方、というレベルに見積もられている。

これに対し主イエスは次のように言われる。

23 節. 「**イエスが、『あなたの兄弟は復活する』と言われると**」 (【NKJV】 Jesus said to her, "Your brother will rise again.")

この主イエスの言葉に対し、マルタの信仰が第二の表現で表されている。

24 節. 「**マルタは、『終わりの日の復活の時に復活することは存じております』と言った。**」

死人が神様によって甦えらされるということは、旧約聖書の中ではダニエル書 12 章に、最もはっきりと教えられている信仰である。当時、ユダヤ人の中に、死人のうち少なくとも神を畏れる信仰的な知識を持っている信者であれば甦る、という信者の復活について信じられるようになっていた。それは、紀元前 2 世紀、1 世紀と、ユダヤ教が非常な迫害の中に置かれるにつれて、殉教の死をとげてゆくユダヤ教徒の中で、義人の復活という希望は鮮明になって来たのである。そして主イエスの時代には、少なくともファリサイ派の人たちは、この信仰をはっきりと告白していた (使徒 23:8 参照)。

マルタとマリアはこのようなファリサイ派の信仰をここで告白したのである。

「**終わりの日の復活の時に復活する**」 (【NKJV】 he will rise again in the resurrection at the last day.) 「**終わりの日**」、歴史が終わる時に義人、信者が甦えらされる。そして、神を信じない、神を畏れない悪人どもは、ゲヘナの火、地獄の日に滅ぼされる、こういうふうと考えられていたようである。

マルタとマリアの信仰のクライマックスを成すのは、27 節の告白である。

27 節. 「マルタは言った。『はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております。』」

この告白は、言い換えれば 32 節のマリアに見られるように、「ひれ伏し」礼拝するという、キリスト教でいう最高の信仰告白である。ナザレのイエスを、この「世に来られるはずの」お方、「メシア（キリスト）」、しかも「神の子」と言い表すということは、キリスト教が期待している最高の、最後の信仰である。

ここまで確認してきたように、マルタ姉妹は、言葉の上では、知識の上では最高レベルの信仰を告白しているが、しかし、実質的な面ではそうではない。例えば、主イエスが「あなたの兄弟は復活する」と言われた時、マルタは「終わりの日」ならそれは分かりますという答えている。今は、そういう事は直接関係がない、私の嘆き、私たちの悲しみには、ちっとも助けにならない、慰めにならない、と言わんばかりである。

もう一つ、マルタは、「主よ、……信じます」と言いながら、実際に主イエスが墓に行き、39 節で“墓石を取り除け”と言われる「主よ、四日もたっていますから、もうにおいます」(40 節)という。

理論の上では、どんなことも可能でしょう、しかし、現実には、墓石を取り除いて、腐りかけた死体を何とかすることができるといえることになると、彼女はやっぱり常識的に、それは無理じゃないか、という反応を示すのである。口とハートとが矛盾しているわけである。

この問題、つまり私たちの口、私たちの頭、私たちの理論では最高の信仰を言い表すということと、私たちの実際の生活、実際の考え方が食い違っているという問題、これを解決することがこのヨハネによる福音書の一番の問題意識である、とある学者はいう。

主イエスは、このように口とハートが食い違っているマルタに、非常に大事なことを言われる。

25—26 節. 「イエスは言われた。『わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか。』」

【TEV】 Jesus said to her, "I am the resurrection and the life. Those who believe in me will live, even though they die; and those who live and believe in me will never die. Do you believe this?"

「わたしは復活であり、命である。(Έγώ εἰμι ἡ ἀνάστασις καὶ ἡ ζωὴ, ΕΓΩ-ΕΙΜΙ-ヘー-アナスタシス-カイ-ヘー-ゾーエー)」

このあとの 40 節で、「もうにおいます」というマルタに向かって、主イエスは「『もし信じるなら、神の栄光が見られると、言っておいたではないか』と言われた」。口ではない。口で立派な事を言い表すことではない。本当にそれを「信じて」、本当にその人のものになっているかどうか、ここで問われている。

主イエスは、5章25節以下で、この甦りに関する御自分の御業を、二つに分けて解説なさっている。「はっきり言うておく。わたしの言葉を聞いて、わたしをお遣わしになった方を信じる者は、永遠の命を得、また、裁かれることなく、死から命へと移っている。はっきり言うておく。死んだ者が神の子の声を聞く時が来る。今やその時である。その声を聞いた者は生きる。」(24-25節)。ここで言われている復活は、今既に死から命に映っている現在のお話である。

これに続いて、今度は5章28節以下に、第二の復活のことを語られる。

「驚いてはならない。時が来ると、墓の中にいる者は皆、人の子の声を聞き、善を行った者は復活して命を受けるために、悪を行った者は復活して裁きを受けるために出て来るのだ。」(28-29節)。ここに約束されているのは、将来の復活のことである。

既に主イエスは、このように現在「死から命へ」移っているという意味での復活と、それからマルタが言ったように「終わりの日の復活」、この二種類の復活を語っておられる。

「あなたの兄弟は復活する」と主イエスが言われると、マルタは**「終わりの日の復活の時に復活することは存じております」と**答えているが、そのマルタに**「わたしは復活であり、命である」**、つまり、終わりの日に復活するような遠い遠い将来のことではなくて、私が、今ここにいる私が、そのあなたの言っている**「復活」**なのだ、と言われる。この「イエスが復活である」という意味深長な言葉を説明して25節の後の言葉**「わたしを信じる者は死んでも生きる」**、霊の体に**「生きる」**つまり復活するのである。

第二に、「**わたしが命である**」というのはどういうことか。それは26節に解説されているように、今、現に**「生きていて」**、生きている間に**「わたしを信じる者はだれでも、決して死ぬことはない」**、永遠の死を死ぬことはない。あなたは**「このことを信じるか」**とされているわけである。

主イエスが**「わたしは復活である」**と言われた時には、ちゃんと定冠詞がついていて、“その復活” (ἡ ἀνάστασις, the resurrection)、今あなたが言った**「復活」**、それは遠くにあるのではなくて**「わたしである」**と語っておられる。

このようにして主イエスは、マルタが遠い遠い世の終わりに漠然と考えていた復活を、御自身の人格に手繰り寄せられたのである。

「死人の復活とは、将来の出来事ではなくて、現在の事である。復活の信仰とは、単なる言葉や教義でなくて、今の事実である。死人の復活とは、ある時の流れの中でいつか起こる出来事ではなくて、今、現に、永遠の命に生きているというその人の状態、生き様なのである。復活であり命であるイエス・キリストを信ずるかどうかが、というイエス様との人格関係に基づいて、復活だとか永遠の命とかが考えられる。」(榊原康夫)